

総督府解体、日本人全員引揚げ命令となった。全く天地覆った感じ、悪夢のようだった。

父と母の両人は山口県下関市の生まれである。

寿美子さんは、朝鮮生まれなので、仙崎に入港した。日本は未知の国なので珍しかった。

寿美子さんにしては、何が何でも、井上氏の情報把握が最優先で、復員局や日本赤十字社を訪ねて確認に奔走した。

昭和二十一年七月に、井上少尉は南方ビルマから骨と皮ばかりになって広島に復員してきた。二人ともうれし涙で感きわまりの喜びようだった。しばらくの間、静養を続けて健康をとりもどし、復員局に採用されて執務することとなり、十月には井上氏と結婚式を挙げてみんなから祝福していただいた。

昭和二十二年二月復員局を辞し、主人井上氏は三井海上火災保険(株)本社の採用試験に合格し、本社勤務から、やがて富山出張所に転勤し、更に東京本社に転勤となった。

寿美子さんは、井上主人の赴くところ、どこへでも

針の糸のごとく世帯のきりまわしから、各種団体、趣味の会などに出席しては咲く花に蝶が舞うごとく場内を沸かしている。

(出)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

親子苦難の引揚記

石川県 平野 高年

前編に父高次郎が九十五歳の老齢のため、父から率直に述べてもらった実話を記し、後編に私(高年)の労苦体験記とする。

父、高次郎の話

私は、福井県越前海岸の鮎川町(元国見村役場所在地)から一里ばかり山間部へ入り込んだ国見村字三本木に生をうけて十三年余りを父母、姉妹らと共に農作業に従事しておりました。十四歳の九月から十六歳の九月まで、大阪市北区源蔵町の加藤商店(叔父の家)

に勤務していましたが、一時帰郷し家事手伝いをしていたところ、大正四年春、農業移民の話が持ち上がり、私方も参加することになりました。それは、東洋拓殖株式会社金堤支店管内の農業移民で一戸当たり田二町歩提供、返済は五年間据置き（利子のみ）二十年間の年賦償還という好条件でありました。私の村からも奥村、如山、森川、刈安、千家の五軒も同時参加でした。当時はまだ朝鮮には虎がいると騒がれた時で不安な面もありましたが、同郷の知人も多いことから将来に夢を持って玄界灘を渡ったものです。今から思えば、本当に小さな千五百トンぐらいの「弘済丸」に乗船、海は大荒れで、この世の地獄かと思われる苦しい船旅でした。渡航に先だった五月に母を亡くし、妹ちよ（十六歳）すえお（十歳）の二人を伴っての傷心の旅でした。末の妹は同年夏、水あたりから体調をくずし帰らぬ人となり、朝鮮の土に幼い骨を埋めることになりました。又翌年九月には父が悪性の感冒により腹をこわし、あつという間の他界となりました。朝鮮での落ち着き先は、全羅北道益山郡五山面（村）新地里小字花

開洞三三九番地（現在の裡里市から群山市より、日本人四家族、朝鮮人十四家族の農村）でありました。以来、稲、麦などの専業農家として多くの朝鮮人労務者（季節労務者）や村内の男女の応援を得て事業は順調に進んでいきました。大正七年十一月妹ちよ（山田信吉氏と）の結婚を見届けて、十二月現役入隊（故郷福井県の鯖江歩兵第三十六連隊）、大正十年正月除隊するまで軍隊生活を経験しました。

大正八年四月朝鮮全土に独立運動が火を噴き日本から鎮圧の軍隊が数個連隊派遣され、多くの犠牲者が出たとのことでした。

私たちの移民のグループは、福井県、石川県、四国のグループなど、結構愉快的な連中が多く、それぞれのお国自慢をしながら楽しい日々を過ごしました。私たちの村から三キロほど南に潮の差し込む大河（万頃江）があり、時折投網を持って漁に行き、大だらいに一杯の漁獲に歓声をあげたものです。又乗馬を習得し、仲間の井邑、論山と遠乗会をしたことも楽しい思い出です。しかし治水が特別良かったわけではなく、大正九

年、昭和七年の大水害（万頃江のはんらん）に家を見捨てて隣村の知人宅へ家族ぐるみ避難したこともあり、大正十二年結婚（清水千松氏ひな氏の長女か）翌十三年長男高年を初め、二男よしのり（一歳にて夭折）、長女数栄、二女幸子、三女光子、三男明男、四男菊雄、四女文子、五女よし子の子宝に恵まれ、生活も安定してまいりました。

水害に対して、干ばつもすさまじい経験をさせられました。豊作の年には、八町歩で八百俵（四斗入）余りの収穫があったものが、昭和十三年の大干ばつにはわずか十俵の収穫で四十俵も飯米を購入したことも苦しい試練でした。

終戦までの間、地区産米改良組合の理事として、増産に努力し、又警防団団長として防火活動に従事するなど、地域の安定に力を注いだものです。昭和十一年家を新築し、更に生活安定、何事も順調に推移していた矢先に、日本がまさかの敗戦になろうとは。

米軍の命令により、日本へ帰国することとなり、身の回りの衣料などを各自手分けして荷物をまとめ、妻

や子供たちを裡里の町へ先発させ、鉄道官舎の空き家へ寄宿、私は長男が原隊復帰、除隊になるのを自宅で待機していました。しかし長男は平壤の教育隊（三八度線以北）に派遣されているので見込みがつかず、ぎりぎりの日程まで裡里と自宅を往復し、ついにあきらめて皆と一緒に貨物車で釜山へ出発しました。釜山駅構内で、わずかの食糧で自炊しながら乗船の順番を待つ身は、これからの生活を思い、大勢の家族を日本へ無事連れもどさねばならない責任感に暗然としたものでした。米軍の所持品検査により預金通帳お金を没収され正に泣き面に蜂でした。船旅も又、白竜丸（三千六百トン）という小型の貨客船で玄界灘は大しけ、全く惨たんたるものでした。昭和二十年十一月三日、舞鶴港へ上陸帰国、大家族を連れて石川県小松駅から電車に乗って鶴川遊泉寺駅へ。出迎えてくれた妻の叔父、高山氏の案内で高山家へ、「御苦労さん」のねぎらいの言葉があるかと思いきや「アラ、むさいこつじやい、どうしよう」一同張り詰めた気力もどこへやら、ぐったりと倒れ込むありさまでした。今生活が一応の

安定を見て、当時を回顧してみればそれは当然のこと、高山の叔父さんが朝鮮へ遊びに来た折には大歓迎をした覚えもあること、何とはなしの期待感があったとしても不思議はない、又受入れ側としても、生活が苦しく、女の子は高等小学校を卒業するや織物工場へ女工として就職している現状であり、大家族の転入には悲鳴をあげるのは当然であります、娘たちは戦後四十年経った今でも当時のショックは悲しい思い出として忘れられない様子です。高山家へ落ちついて、納屋の二階を借りて日本での生活を始めましたが、鍋、釜、茶碗類に至るまで借り物、少しずつ買ひ足して生活の軌道に乗るには相当の時間がかかりました。朝鮮で多勢の人夫を使って農業をしていた身が、一転穴蔵へもぐり込む坑内労働はかなりの抵抗がありました、隣村に岩湧鉱山があったので、慣れない坑内作業ではありましたが思い切って採用を申し入れ、臨時期間を経て昭和二十一年六月本採用となり六十歳で停年となるや、下請会社(株)小倉組の鉱石運搬夫として七十一歳まで頑張りました。その間、鉱山の仕事の合間には近所

のお百姓の畑を借りて、野菜物を作ったり、年により水田を借り受け、米作りを心がけ夜も昼も食料の確保に奮闘いたしました。

長男は、終戦時北朝鮮に幹部候補生として学校分遣されていたので、ソ連軍の捕虜となったものと思われるものの情報不足で不安な日々を過ごしていましたが、人のうわさに、福井に良く当たる八卦見がいると聞き早速に占ってもらったところ、「想像もつかぬ遠い所にいる。元気でいるから心配するな。近く便りがあるか、本人が帰ってくるか音信があるはず」との御託宣をいただいたものでした。

それから間もなくウラジオストック気付の国際赤十字郵便が舞い込んで来ました。

「至極元氣乞安心目下食糧事情良、平野高年」まるで漢文の電報のようなハガキでした。捕虜になっても、食うものに困らなければ、いつかは元気に帰国するものと信じ安心したものでした。昭和二十二年十一月三日長男は帰国しましたが、やせ細って青い菜っ葉服を着てビッコを引いた姿は「支那人の労務者」と陰口を

きかれる始末、遠くコーカサスの収容所で毎日毎日トルコの山々とにらめっこをしながら作業をしていた由、ハガキの件については、「文字は二十五文字以内ただし、漢文も一字と数える」との指示があったことと、食糧事情悪しと書けば手紙は絶対に出してもらえないと思ひ、皆と相談して反対語を書き推察にまかせたこと、ハガキを書いた時は骨と皮の幽霊のようだったと聞き、大笑いしたものです。

長男は復員後、石川県庁の採用試験に合格、保健所、土地改良事務所の課長を歴任、五十八歳で勸奨退職まで勤めました。

岩湧鉦山の社宅は、各支山を会社の都合で転々と移動した。再々建築の老朽家屋で、便所もない（別棟バ拉克の共同便所あり）お粗末なもの、一度台風が来れば屋根のトタンはめくれるし、雪が降れば、窓の隙間から掛布団の上に白い筋が幾つも付着するていたら、辛うじて雨露をしのぐ程度でした。

鉦山の社宅移動の話が出た昭和二十五年の暮れ、現在地にあった朝鮮人大山某の小さい（二間きり）家が

本人の転出により空き家となることを聞き格安に譲り受け、岩湧町の住人となった訳です。

一方食生活は、わずかばかりの着物、帯など換金できる物、物々交換による米、ジャガイモなど、中ノ峠の山中まで、くず薯の買い出し、妻は福井駅前まで経済警察の眼をおそれながら、「にぎり飯」のヤミ商売をしたり、配給の砂糖を買い集めて小松市の菓子屋へ卸し売ったり、飯の種になることなら泥棒以外何でもというありさまでした。というのも、私をはじめ毎日弁当を七つ八つ（子供六人）中海小学校で最も多い子だくさんの食い盛りの家庭のためです。

そのうち、朝鮮で習い覚えた水飴の製造を思いつき、社宅の土間を改造して作業場にしました。麦芽の製造―乾燥―餅米の蒸し上げ、糖化↓水飴の型入れの工程を経て、座布団ぐらいの大きさ（一個六キロ）に固める。

一度に二個ぐらいずつ運搬する。卸先は、小松市及び山代温泉の菓子屋（最中の餡に使用）で、当時幅をきかしていた経済警察に、何度捕まりかけたことか。

又、密告する者があって小松税務署間税課の調査を受け、物品税の申告を義務づけられ、申告書記載方法の指導を受けたり、無申告につき呼び出しを受け、散々油をしぼられたことを思い出します。

そのうち、朝鮮人が「さつまいも」をむして造ったいも飴を菓子屋に卸し始め、品位を落とされたのと、北海道の澱粉より製造した水飴に、得意先を奪われ廃業に追いやられてしまいました。

戦後の五十年には、我が家にも色々なことがありました。帰国後に生まれた五男（豊稔）が、食糧事情好転の時期に生野菜を受け付けない拒食症（敗血症）におかされ病院の門をくぐる度に「僕、何でも食べる、人参も大根もゴボウも食べるから注射だけはしないで」と泣き叫び訴えつづけ、その実人参も大根も口にされた物は全部嘔吐してしまう悪循環から日に日にやせ細って五歳の幼い命を、天国へ旅立ってしまった。医療技術の遅れによる悲しい出来事でした。今も、時々泣き声が聞こえる気がします。

また、うれしいことは子供たちが成人して次々と結

婚独立して、それぞれの分野で成功し、今では孫が二十人曾孫が四人と末広がりの発展をしていること。

なかでも、一番大きな喜びは、長男（高年）が良縁（佐々木慶子・樺太からの引揚者で現地で父を亡くし母子家庭の長女として苦勞を背負って来た人）を得て、元気に頑張っていること。個性の強いたくさんの小姑の中でよく兄弟の面倒を見、姑と仲良くし、先年亡くなった妻は一日として退屈な日もない。幸せな七十五年の生涯を閉じたこと、又、昭和五十年に長男が家を新築（延七十三坪）し、引揚げ以来の念願がかなったこと。今、人生の終焉に近づきつつある現在、来し方を振り返り、戦争に振り回され、苦難と試練に遭遇しながらも、多くの人々の厚い情に助けられて、精一杯に生きてきた私の人生に悔いはありません。特に当岩湧町の上下わけへだてのない和気あいあいの雰囲気は、引揚者として差別されることもなく、伸び伸びと九十五歳の今日まで生活できたことをうれしく思い残り少ない人生を「死ぬまで元気」の合言葉で、浄土からお迎えの来る日まで楽しく過ごせれば幸せと思っております。

ます。再び戦争の起こらない平和な日々が続くことを心から祈りながら、私の話を終わります。

私（高年）の体験記

昭和二十年八月十五日私は陸軍甲種幹部候補生第十三期生として、秋乙の朝鮮軍教育隊にて訓練を受けていた。

区隊長赤星中尉より「正午に営庭に整列せよ。天皇陛下の玉音放送がある。心して拝聴するように」と達しがあったので全員営庭へ駆け出した。全隊員整列の後歩兵隊長田中均五少佐より再び同様の注意があり放送が始まった。雑音が多くよく聞きとれなかったが「汝臣民耐え難きを耐え偲び難きを偲び、国の復興に力せよ」という節と無条件降伏ということが聴きとれた。「まさか」と我が耳を疑ったが「我が日本は連合国に対し無条件降伏をした。幹部候補生の教育は、本日をもって中止する」という歩兵隊長の発表があったので初めて終戦を確認し、悔しさに心臓が止まるほどのショックを受けた。「幹部候補生は、各区隊へ戻り、命令を待つように」と示達があった。

機密文書その他教育関係書類の焼却をしたり自活菜園の南瓜を鉄兜の中で焼いて食べたり無為に日を過ごしていたが、「幹部候補生は完全軍装をして治安維持に当たるよう」命令され、私の区隊は教育隊の官舎警備に一週間担当させられ、次いで鎮南浦近くのマグネシウム工場の日本人社宅の警備に部隊として従事した。鎮南浦において約一時間休憩した折、近くの殖産銀行支店へ行き、（私は裡里支店在籍中）「平野の口座から百円引き出してくれ」と申し入れ、銀行の出納係が準備して袋詰めしているとき、突如として非常呼集のラッパの音が聞こえて来た。「又出なおして来ます」と金を受け取らずに飛び出してしまった。何事かと思いきや、命令は「ソ連軍の命により憲兵隊において自主的に武装解除せよ」とのことであった。最初に来た時の勇ましさはどこへやら武器弾薬、車両、軍馬に至るまで憲兵隊に置きざりにして丸腰に手拭の鉢巻をしめ、トラックに分乗し、逃げるようにして教育隊へ帰着した。帰る早々三合里の旧陸軍演習場の廠舎へ集合、ソ連軍の手により廠舎はいつの間にか捕虜收容所に早

変わりしており、鉄条網の垣根の外側には百メートル間隔で重機関銃の台座が設けられいつでも発砲できるよう内部へ銃口が向けられていた。

収容所へ入ってから、毎日使役の割り当てがあり、私の中隊は牡丹台の平壤飛行連隊の爆弾及びその他の弾薬、兵器燃料の処分を担当し、ついで師団の火薬庫（山の洞窟）の火薬処理、ソ連の親しくなった軍曹が「こんなに大量の火薬があるのに日本はなぜ戦争に負けたのか」と問うので「お前らに負けたのではないアメリカンスキーの原爆に負けたのだ。しかもミカドの命令があったから」「ミカドはなぜハラキリしないのか」といわれ絶句した。

ダモイ（帰国）の道遥か

翌昭和二十一年春ソ連軍よりスコラ、ダモイ（直ちに帰国する）といわれて汽車に乗り興南の港へ到着、収容所（元イギリス兵の捕虜収容所）へ軟禁（収容所を見下ろす高台に重機関銃が銃口を下に向けて威嚇している）される。乗船の順番待ちということで港灣仲仕（ソ連軍の戦利品。米、銅、鉛などの粗鉱、牛肉な

ど）の船積み作業に従事した。本来、この時点で不審を持つべきであるが、船に乗りさえすれば祖国日本へ帰られる。と単純に思いこんでいたものだ。

六月初め、その船に乗せられ連絡船の歌など合唱しながら、興南の港を後にした。左手にいつまでも朝鮮の夜景を見ながら、使役の疲れからいつしか眠りに落ちていた。周囲の騒がしさに眼を開ければ、船はいつの間にか港に停泊中であり、賑やかな声に岸辺を見れば赤や青、黄色の原色の華やかな服が目立ち、日本も終戦と共に国防色とオサラバしたのかな。「オイ、日本じゃないぞ、ここはソ連の潜水艦基地ポーシェト港だ」「まただまされた」上陸を命ぜられ、ソ連の将校より「ここは設備も悪いし、食糧も余り蓄えがないので、ウラジオストックへ行つて、服装を整えてからダモイだ」という話で、又、列車の順番待ちで付近の大豆畑の除草作業に従事させられた。

この歩哨はノモンハン事件、ハッサン事件の遺族たちで、自分の父は、日本兵に殺された。自分の兄は日本兵の銃剣で片足を亡くした。などなど作業場まで

の往復は、牛馬扱い、帯革の金具の方を先にして後から鞭打つ、たまりかねて前へ詰めると前の歩哨には銃の床尾板で突き戻される、横にはみ出してもしかり、生傷の絶え間なしであった。

約一か月後貨車に乗り込むことになったが又、一騒動、六十トン貨車の両側に二段装置を設け一両に五十人荒筵敷きの中でまるで動物扱い。「便所はどこだ」といえば、四角（十センチ四方）の木の筒を一本取り付ける。「大便はどうするのか」と問えば、「ヤポンスキーの尻の穴は十センチ以上あるのか」という始末、やっと乗車した途端に「カンカンカン」と音がして扉は外から釘付けされてしまった。

夜中にゴウゴウと汽車は海中を渡るごとく、長い長い鉄橋を渡っている。地理で習った地形を思い出して、ひょっとしてハバロフスクへ向かっているのではないが、そして先の鉄橋は、黒竜江の上だったか、ウラジオとは正反対、まただまされたのだ。もう、棺桶に入られたも同じ、どうするすべもなし。皆一様に「こうなれば、どこまで流れるのか、トコトン付き合っ

やろうじゃないか」と開きなおってしまった。

列車は、我々の意志を無視して一路西へ。バイカル湖に面する小駅に着いた折、薄よごれた服の漁民の女たちが、アルミの盆の上に鱒（マス）の唐揚げを四、五匹乗せて「ルイバナード、（魚を買ってくれ）ヤポンスキー」「馬鹿野郎ワイノフレンニー（戦時捕虜）だゼンギニェト（金はない）」「ミューロナーダ（石けんでもいい）」としつこい戦争に勝った国民が捕虜に品物売って日銭をかせぐ、あわれな一駒であった。

汽車はウラル山脈を越え更に西へロシア共和国へ入り南下してボルガ河口の町アストラハンを渡り、更に南下してバクーの油田地帯（石油槽の林立を見る）を過ぎ、夜半にジョールジア共和国の首都トビリシを通り過、コーカサス山脈とトルコ山脈の山あいを西へ走る。夜明けに終点クタイシの郊外の自動車工場の引込線に到着した。

作業は自動車工場の建設、それぞれの技能に応じて仕事を分担した。私は、五階建てのビルの屋上のコンクリート打ちで、ターチカ（ねこ車）にセメントを入

れて屋根の上を走り回る。何度ターチカと共に下に落ちかかった事か、昼は重労働、夜は南京虫に痛め付けられ能率は上らない。食糧は減らされる。曰く働かざる者食うべからず「ラポートニエト、クーンシャイ（食事）ニエト」やせ細って骨と皮、股の皮を引っ張るとあたかも股引きのように伸びてくるのは何とも悲しいものである。月例の衛生検査では、軍医ソ連の軍医と日本の軍医立会いの前でスッポンポンの裸になり「ハイ立って、前を向いて、後を向いて、尻の肉をつかんで」「ハイ一級（重労働）、ハイ二級（軽作業）、ハイ、オカネ（営内作業）」といった、塩梅であり尻の大きな私はマラリアで倒れるまで重労働であった。

昭和二十二年の初夏のころ工場の入口で新聞売りの少年からイズベスチャ（政府機関紙）を買ったところ「日本人捕虜の送還始まる」の大みだしが眼についた。「オーイ、ダモイだぞ」と戦友に呼びかける皆が集まったときソ連人の徴用工が「どこだ、どこだ」と首をつっ込んで聞きにくるではないか。「馬鹿野郎だめえさつき新聞を買ってたじゃないか」といえば胸をた

たいて折りたたんで小さく切った（タバコの手巻用）紙片を見せる。「しかたがないそら見よ」「すまん、読んでくれ、そんな活字わしは苦手で」アホらしい何でロシアへ来てソ連人にロシア語を教えないかんのやと一同大笑いしたものである。記事によれば作業優秀大隊から帰すとのこと、作業能率研究班を編成してあらゆる方策を駆使して收容所全体の成績を一三〇％に乗せ、早々と帰る順位を勝ち取ったものだ。これで、出たらめな共産党の手から解放されると万歳を叫んだ。相も変わらず栄養補給のための蛙、トカゲ捕りに熱をあげながら、サア、帰るぞ、来た時の逆コース、汽車は一路東へ、バイカル湖に差しかかった九月一日初雪（ソ連は広い）九月末ナホトカ着、港には、日の丸の旗を風に靡かせた帰還船が見える。涙にむせびながら戦友と肩をたたき合い思わず万歳を叫ぶ。ここに共産党の大きな畏が待ち受けていようとは、神ならぬ身の知るよしもなし。到着した列車に近くで作業していたらしい兵隊が気安く声をかけて「大分遠方からのようですね、どちらからですか」「ア、私たちがね、コーカ

「サスからですよ」「今までで一番遠い組ですよ、どうです向こうのソ連兵は」「ア、最低だよ、教養はないし、食べることでセックスだけの動物並みだよ」これが共産党のスパイだとは後から分かった。

九月末で朝は氷点下にまで気温の下る海岸で、あいにくの土砂降りの雨、テント一枚頭からかぶっただけ、下着にまで雨が染みとおって凍死するかと思われた。

その翌日は海岸で待たされ深夜第一收容所の劇場の床下へ避難、民主グループ（共産党）曰く「憎むべき反動片山内閣が約束を守らずに船を回して来ないから、せつかく港にたどり着いた貴方たちを收容するテントがない」と。

翌朝、やっと乗船した組の空テントへ入れられたが、「テントには不寝番を立てよ。守則は、火災盗難の予防」というお達しである。二日も雨に打たれて自暴気味の私たち「火災の予防といっても煙草もなし火種もない、盗難といっても盗まれる物もない。ましてや、これほど民主化されたソビエトに盗人のおるはずがない然らば不寝番の必要もなし」と大声にはやしたてて

寝についた。これを民主グループの巡察に聞かれたらしい、「四百九十二中隊は、徹底した反動グループである再教育の必要有り」と決定した由（後日仄聞）五日ほど近くの農作業手伝いの後、四百九十二中隊身体検査を行ないますので整列して下さい」

日の丸の旗が目前に迫っている。胸おどらせて軍医の問診に「どこも悪いところはありません」と元気よく答え「ハイ一級」の声に喜びを隠せず二級以下の戦友に「お先に」とあいさつし、名前を呼ばれた百人は、荷物をまとめて整列した。やがて民主グループの委員長壇上に昇り、乗船についての注意と思いきや「四百九十二中隊の方々、まことにお気の毒です。只今から山へ伐採に行ってもらいます。ナホトカへ集結する皆様の炊事用、暖房用です。皆が交替で順繰りにすることとなっております」と聞くと同時に足もとにポッカリ大穴が開いたように思わず座り込んでしまった。

タイシュットの山の收容所で伐採作業中大木の下になり大けがをしたのも気力が抜けていたためか、山は冬將軍間近の様相、朝は薄氷が見られる日々であった。

昭和二十二年十月も残り少なくなったある夜、明日早く炭鉱労務「四十五ソーロクピャーチ」へ出発するこゝとで沈み込んでいる第六中隊へ「小隊長以上集合」の命令が出され、約三十分後、収容所長と交渉を終えた幹部から「ダモイだダモイだ」との報告があり一同「ワァーッ」と歓声をあげたものだ。タイシュェット収容所内の出来事である。当初、だれも信ずるものなく、「あほらしい、又だまされるのだ。どうせ明日はソーロクピャーチだ、いずれにせよ五十歩百歩だ。寝よう寝よう」との声がほとんどであったが、中隊長から詳細ないきさつを聞くに及んで、真実味を帯びて来た。

出発の時刻、人員、方法など再度収容所長と交渉、ソ連側は出発することはするが列車に余裕が出てから」といい我々は「作業用のトラックを出せ」ソ連側「作業のノルマが落ちるからトラック三台も出すことは出来ない」「捕虜を帰還させる内務省の命令と作業ノルマを気にする労働省の命令とどちらが優先するか」ナホトカに日本の船が来ていて、ソ連の輸送が間に合わないときは、収容所長の責任だけでは収まらな

い」「それでもトラックは出せないのか」と粘り強く交渉し、ついにトラック三台を確保した。(我々が必死に交渉したもう一つの理由は年末に近く、ナホトカ港凍結も間近く、この機会を逃したら来年春までダモイはお預けとなることは必至であった)。

翌朝未明百五十人ぐらいは三台のトラックに分乗し、一路ナホトカへ出発し車が壊れるような悪路の中をひた走る。夕刻山の麓で我々の乗っていた車が故障、全員下車し徒歩にて山道を一步一步前進。前の二台の車は、我々の車を牽引して山頂へ進む。私は六日前、伐採の事故により膝を痛め、仮のギブスをあてて戦友の肩にもたれて辛うじてトラックに乗っていたものの、いきなり下車されようとは、運命とあきらめつつも、足の痛さには耐えられず、皆から一步遅れ二歩遅れして百メートル近くも置きざりにされて、歩哨と二人片言のロシア語で大声にわめきながら、ビッコを引き引き。

耳元で大声「ブイストラ、ハジー(早く歩け)、私は「やかましい、耳がこわれる」と負けん気の大声で

口を返す。ところが歩哨が私の背中をたたき、後方を指さし「スマトリ（見よ後を）」ぎょっとして歩哨の指の先方を見ると薄闇に不気味に光る狼の眼、その数五つ六つ足音を殺して、しのび寄るのが見受けられる。「ソ連兵よお前は実弾二百以上持っているだろう五匹や六匹なんだ」「ヤポンスキー何を言うか向こうの山を見よ」「二百の弾があっても三百匹出て来たらわたしは食われてしまう。大きな声を出さないとすぐに追いつかれるぞ」なるほど、私たちの歩いている向かい側の山の斜面には木の間がぐれに燄火に似た、光の行列、背中に氷を入れたような恐怖感に震えたのを忘れ得ない。今でもときどき当時の夢を見て夜中に大声を発し、家内をびっくりさせることがある。

歩哨は「足を負傷しているなら、つぎの収容所で置いて行く」、置いて行かれては大変だ、「車から降りるとき捻挫したのだから明日は全快している」と手まね足まるで説明しながら「私を皆の待っているところへ連れて行け！」と歩哨のマシニングンのベルトへ腕をおしてぶら下がるようにして歩いたものだ。これは万

一の場合はマシニングンを分捕って打ち死にする悲愴な覚悟もあった。三十分余り遅れて焚火をして休憩中の皆に追いつき丸太棒のように感覚のない右足を投げだして青息吐息、生きて帰れそうな気がしたと思ったとたんグロッキーになった。

朝から何も食っていないので少量の米を出し合って炊事当番を決め、一人で六個の飯盒を持ち、両側にタイマツを持った兵隊と三人一組で谷川で米を洗う。という順序でやっと飯にありついた。ところで出来上がった飯たるや洗った形跡など皆無、米粒一つに砂三つ、とても食えた代物ではない。「当番、これは何だ。砂ばかりではないか」と文句を言ったところ「それじゃ自分で洗ったら」と返す言葉はすさまじい、大変なのはわかっていての苦情であり、自分では恐ろしくお断りなのだ。

車の修理の出来るまで、焚火の周囲で談笑しているとき、誰か「オイ、畑に何かあるぞ」と盛り上がった土を蹴ったところ馬鈴薯が五く六個転げ出て来たではないか。ソレツとばかり皆が畑のあちこちの掘り残し

の薯（実はコルホーズに納入する収穫の隠匿品）を拾い出し焚火の中へ投げ入れて一時の飢えをしのいだ。今から思えば貧しいロシアの農民が監督の眼を盗んで必死の思いで隠していたものをかわいそうなことをしたとほろ苦い思い出となっている。

夜道は危険とのことで山頂で夜を明かし、夜明けと共に急斜面を一路ナホトカへ、夕刻到着。ところが人生何がしあわせになるかわからない。一日遅れたため第一、第二收容所の関所はパスしていきなり第三收容所へ入所、ウランパートル收容所の吉村大尉の罪状摘発カンパを横に見ながら、スターリン元帥並びに偉大なるソビエツト同胞への感謝決議文を朗読して、懐かしい日の丸を掲げた第一大拓丸へ乗船し、ナホトカ港を後にした。乗船後も今までに何十回となく偽の情報に移動させられ、故国を段々と離れていった経緯から、本当に日本へ帰れるのか、船中で米軍の二世将校から「今、日本海の真ん中です、もう、ラボートはありません、ご安心下さい」とは言われてはいるのだが、夜明け前に舞鶴港に入港した。霧の晴れ間から朝日に輝

く鈴成りの柿を見た時は、全く感無量、「帰ったぞ」と一声叫んだぎり、こみあげる涙をぬぐいもせず、呆然として立ちつくしていた。

【執筆者の横顔】

平野高年氏の両親が若き日に折角日本が、日韓合併して朝鮮を日本内地の産業文化と同じように発展せしめなければ合併の意味がない。それには身をもって朝鮮に入り、自分でできるのは農業移民であると決意して、朝鮮の郡山の奥地に入植し、現地朝鮮人と相協和しながら農地を拡大し、年間四斗入りの俵で八百俵の収穫をあげるに至った両親の働く姿をみながら育ったのである。

両親の絶え間無い努力に感心しながら育った高年少年は、裡里農林学校に通学しながら、休日の日などは農業や家事に助勢してきた姿に、近隣の人々から感心な少年であると評判されたのである。

農林学校農業科を優秀な成績で卒業していたところ、戦争たけなわになって平壤の陸軍予備学校に入學し、

幹部候補生の在学中に第一線に出陣直前、突如日本敗戦にあった。

たちまちソ連軍の捕虜となり、日本に帰国せしめるとの偽言を聞いて乗車したところ、ソ連の奥地に送られ伐採などの強制労働をさせられ、死線を越えること幾度か、ついに大負傷にあい身体障害者となる。しかし、与えられた強制労働の成績優秀者と目され、生きて日本に復員となった。

両親の年波に孝養し家族を守るために、当時難関の県職員採用試験に身障の身で合格したのは二十五歳だった。

本庁に又地方機関の保健所や土地改良課の課長、高校の事務長などの重職にあつて、県知事から信任されて定年退職された人である。退職後、税務に精通しているところから、県酒造組合の事務長に迎えられて十年間勤務された。

現在はずべての公職を辞し、県交通安全指導者として社会奉仕をしている九十五歳の父親に孝養をつくしながら、なお社会福祉に精進する高年氏は生還されて

の行動は、引揚者の範である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助